

国立国語研究所学術情報リポジトリ

九州における活用型統合の模様とその経緯： 『方言文法全国地図』九州地域の解釈

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Kyusyu dialect, conjunction system, difference in areas 作成者: 彦坂, 佳宣, HIKOSAKA, Yoshinobu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002058

九州における活用型統合の模様とその経緯 —『方言文法全国地図』九州地域の解釈—

彦坂 佳宣

(立命館大学)

キーワード

九州 活用体系 地域差 方言史 『方言文法全国地図』

要旨

九州での活用体系は、上一段型・上二段型のラ行五段化、下二段型の保持、ナ変の五段化の傾向が強く、サ変・カ変を除けば五段と二段の二極化とされる。本稿は『方言文法全国地図』の関連図を、(1) 活用型によるラ行五段化率の序列、(2) 二極化に関する諸事象、の組み合わせから分析し、従来の研究に加え九州に特有の音変化傾向も二極化と地域差の形成に強く関与したことを論じた。また、近世以降の方言文献を参考に、これが近世末辺りから生じたことを推測した。

はじめに

『方言文法全国地図』(以下GAJ)による日本語の活用体系について、大西(1998)によれば、その状態は西日本は類の区別が多く、東日本は統合が進んでいるとされる。たしかに東日本では五段型と一段型(カ変・サ変もこの傾向)のかなり単純な体系であるが、西日本は複雑である。近畿では共通語と同じ5活用型、中国・四国でナ変型が増える。しかし、これを九州に伸ばせば、その様相は一変して、カ変・サ変はほぼ保たれるが、二段型の保持という古い面と、一・二段型のラ行五段化という新しい動向に、ナ変型の五段化もあり、複雑で地域差も強い。本稿は、こうした九州での活用の統合がどの様な経緯で起こったものかについて考察する。

1. 従来の研究と本稿の立場

1.1. 従来の研究

上の模様は、既に明治の『口語法調査報告書』(以下『口語法』)に兆候があり、吉町(1952)や『方言学講座』『講座方言学』などに所収の論に今日に近い記述・報告がある。

最近ではラ行五段化(下一段は既に早く五段化)に関して、陣内(1981・89)小林(1996・97)などがあり、主として地理学的検討からその要因の考察もなされている。

これに対して迫野(1998b)は、GAJなどから活用体系の構造的な統合の模様を「内的再構」の立場から考察している。全体の動向を、ナ変および上一段・上二段の五段化と上二段も一部とりこんだ下二段の保持、要するに五段型と二段型の二極化(サ変・カ変を除く)とし、活用型の単純化が共通語と違う仕方で行われたとする。この中で、二段型は、体系的な一段型化を経ず直接五段化したとする指摘は新しいものであろう。

その活用型の変化動向は、迫野氏にも詳しいが、およそ次の様なものである。(『九州方言の基礎的研究』271頁以下から要旨の形で示す)。

- ・二段活用の残存が注目され、特に下二段が顕著で、九州全域に見出される。
- ・上二段は西部・南部で上一段化し、本来の一段型と合わせラ行五段化しつつある。しかし、東北部一帯には弱い。
- ・上二段は、大分県北部などでは保たれ、北九州から豊日一帯にかけては下二段化傾向あり。ナ変の説明はないが、後述の様に五段化の傾向には、かなり地域差がある。

1.2. 本稿の立場

本稿は、迫野氏の言う活用体系の二極化傾向を、もう少し地域差に関わる諸要因を考慮する形で説明しようとする。その要因として、上の研究のほか、彦坂他(1996)にも述べた活用型の性格差・九州特有のオ段長音の開合事象、また特に西部地域に顕著な音変化傾向を考える。

なお以下、活用体系は従来の活用型の命名とも関連する学校文法の<未然形>～<命令形>の枠組とし、体系としての活用形は<　>で示す。GAJの活用事象の図の活用形とその見出しあは、原図見出しに従って、意志形「見よう」・使役形「見させる」などの形で示す(「見よう」の具体形にはミョー・ミューなどが含まれる。実際の語形はカタカナで示す)。語見出しあは【見る】【起きる】などで示し、九州では近時まで古典語に準ずる活用型が続いたので、これらの語の活用型は基本的にそれにより、変化がある場合には「～段化」などとする。また、<下二段「開けろ」>の様な表示は、「古典語で下二段型に属した語【開ける】の命令形」の意味で、下二段型のアケヨ、五段化のアケレなどの具体形があることになる。

2. GAJ 関連図の分析

ここでは、GAJの関連図を上の二極化傾向とその地域差などについて改めて分析する。初めに具体的な活用形の模様を検討し、その後これによって活用型の体系とその地域差についてまとめる。

2.1. 一段・二段型のラ行五段化

ラ行五段化は、所属語の多い元来のラ行五段動詞への類推であることは勿論として、(1) 活用型の性格や(2) 地域的関連事象とも関係するものと思われる。分析は(1)の活用型別と(2)の地域差に関与する事象の掛け合わせの分布模様を解釈する方向で考える。

ア) 終止・連体形の場合

最初に、この基本形を取り上げ考察の見取り図を得たい。GAJでは終止形の「見る」(準備調査)「起きる」(61図)「寝る」(66図)「開ける」(64図)、その他が手がかりとなる。

ラ行五段化とは、例えば【起きる】なら、次の様に語形変化することになる。

意志形：オキロー、 否定形：オキラ (ん)、 音便形：オキッ (た)、 終止・連体形：オキル
仮定形：オキリヤー、 命令形：オキレ

元来の一段型なら終止・連体形はそのまま五段型に組み込まれるが、二段型はオクル（起）ヌル（寝）などがオキル・ネルへと、一旦いわゆる一段化した形（便宜上、これも一段化と呼ぶ。九州で体系としての一段型の過程があったか否かは後考）となる必要がある。この点だけでも、終止・連体形のラ行五段化可能性は、元来の上一段型で容易、二段型は難しい。また、上一段型は語幹一音節語が中心で不安定であり、この点でもラ行五段化しやすい。

図1で、元来が二段型の【起きる】【寝る】【開ける】の終止形の二段型保持の模様を示した。

「開ける」はほぼ全域二段型（図に示していないが、一段化形が西部を中心にやや併用される）、「起きる」は二段型が西北部に少しと東部に広く、他は一段化形、「寝る」は二段が西北部にやや広くあり、東部を含め他は一段化形になっている。

語により分布差があるが、他の語も参考にすると、概して（1）元来が下二段型の語は、全域で二段型が強く、その一段化形は西部を中心に混じる、（2）同じく上二段型は一段化形が西部に多いが、旧来の二段型が西北部に少しと東部に強い状況である。類例には次の様なものがある。

（1）下二段型の語例は『九州方言の基礎的研究』で「考える」、GAJの使役・受身の助動詞【（さ）せる】(118図他)・【（ら）れる】(115図他)などでも似た分布が見られ、（2）上二段型の語例はGAJ準備調査の『方言文法資料図集（2）』の84図【出来る】、GAJ 204図【落ちる】でもやはり酷似した分布である。すると、図1で【寝る】が元来下二段型なのにかなり西北部の狭い範囲だけ二段型を残すのは、短音節語として一段化が早かったという面が強く作用していると考えられる。この点は、準備調査『方言文法資料図集（3）』139図「寝れば」でも、二段保持の分布はやはり似ていて、一段化の分布が広い。

以上から、ひとまず活用型から見た五段化率の序列は、上一段型を含めて次の様になろう。

上一段型（【見る】）>上二段型（【起きる】）>下二段型（【開ける】）

地域の上では、まず東部地域は二段型保持の傾向が強く、次に西北部が続いている。後述の様に、他の活用形の五段化率とその分布模様もこれとよく連動する傾向が強い。

次からは、従来、五段化率が高いとされる活用形の順に五段化を検討するが、最もラ行五段化率の高いとされる「使役形」は他と事情を異にするので後にし、まず「命令形」から検討する。

イ) 命令形の場合

このラ行五段化は、ミヨ・ミロなどがミレ形になることを言う。

小林(1996)は、全国的な分布からラ行五段化形～レ（オキレなどのこと）が命令形～ロ（オキロな

図1. 「起・寝・開」の二段型図
(GAJ 61・66・64図より)

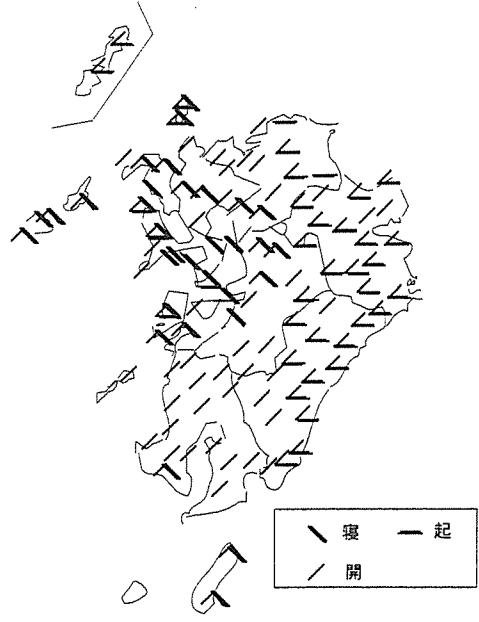


図2. 「見ろ」(GAJ 86図より)

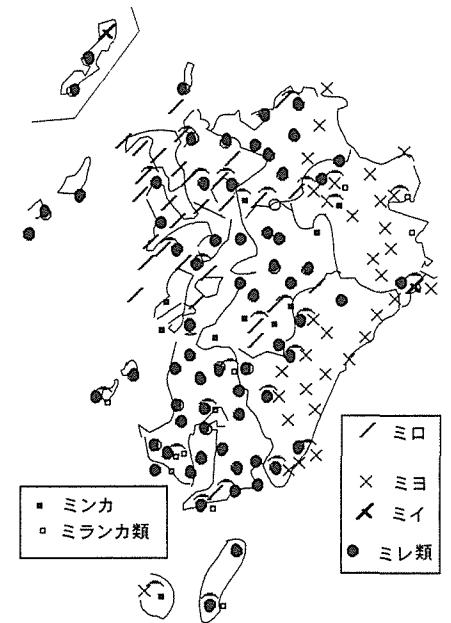
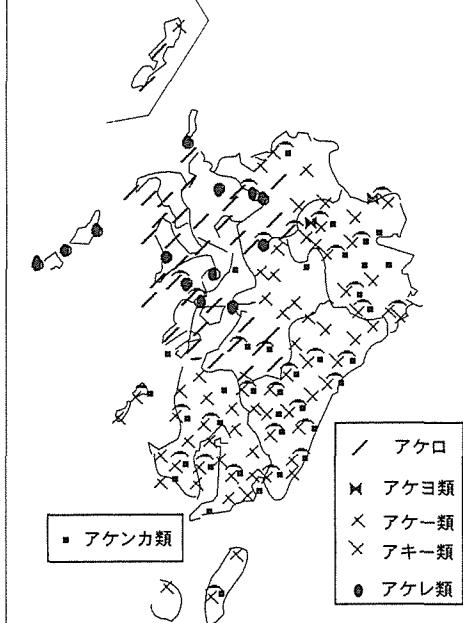


図3. 「開けろ」(GAJ 87図より)



のこと)から変化したとする。また、語により五段化率に差のあることを指摘する。

さて、五段化形の分布の大きさは、GAJの関連語では、ほぼ次の順となる。

「見ろ」>「起きろ」>「寝ろ」>「開けろ」「使役助動詞～(さ)せろ」

上一段型「見ろ」(86図)を筆頭に、上二段型「起きろ」(85図)と下二段型の短音節語「寝ろ」(準備調査)、最後に下二段多音節語の「開けろ」(87図)および「使役の助動詞命令形」(122図)という序列で五段化(～レ化)が進行している。これは、ア)終止・連体形で見た活用型による順と基本的に一致する。図2に「見ろ」、図3に「開けろ」の場合を示した。

これらの分布は、(1)「見ろ」「起きろ」「寝ろ」は西北部に旧来の～ロを幾分残しながら、東部を除き全体に五段化が強く、「開けろ」「～(さ)せろ」は五段化が遅れ、西北部の周辺に五段化形が散見される程度、(2)どの語も東部は五段化しない、という傾向がある。

以上からは、上の(1)西北部に各語の五段化形の中核がある意味、またその中核部を越えるか否かは何によるのか、(2)東部に二段型形が残存する理由は何か、が問題となる。

(1)の西北部の五段化の中核地域は、九州で旧来の命令形が～ロの地域である。早く中世末のロドリゲス『日本大文典』に、「肥前・肥後・筑後」とされ、九州方言学会(1969)上村(1998)などにも同様の報告がある。この点で、小林氏の～ロ>～レの見方は的を射ていると思う。五段化が後発の図3「開けろ」で～ロ周辺に～レが分布する模様もこれを支持しよう。しかし、なお、(3)五段化の中核地域でも、旧来の～ロ形が残ることも問題となる。

五段化の発生と進出 旧命令形～ロ地域が～レ発生の中核とすると、五段化の先行する活用型が上一段「見ろ」・下二段短音節語「寝ろ」・上二段「起きろ」であることは、短音節語類が、本

來のラ行五段型にまず引かれ、所属語の少ない上二段が続いたと説明出来よう。しかし、なぜ発生母体と考えられる命令形～ロの分布域を更に越えられたのであろうか。

この点を彦坂(1999)では、南部地域の～ヨ系統命令形が聞こえの小さい～イ・エ末尾形のため、聞こえの幾分大きいラ行五段動詞～レ命令形に容易に浸食されたと見た。南部の命令形～イ・エ末尾形の模様は、旧来の形式を留めていると思われる図3で分かる。

本稿では、さらに考えを進めて、この過程に次の様な九州西部の音変化傾向が関与したと見る。

語末のイ列音・ウ列音の変容は、鹿児島・熊本・長崎に著しく、九州の北部・東部へ移れば、さほど目立たなくなる。鹿児島本土、宮崎の諸県地方、長崎の五島では、この事象が最も濃厚でために多くの閉音節を作り出す。特に薩隅方言の、語末の内破音、はねる音、イ音などは、一拍分の音としてはいずれも短かめに聞こえ（中略）いわゆるシラビーム方言の性格を示す。（九州方言学会『九州方言の基礎的研究・改訂版』266頁～）

西部地域で終止・連体形の「見る」「起きる」などがミツ・ミイ、オキッ・オキイ形をとれば、同じ地域で～イ・エ末尾をもつ～ヨ系命令形とまぎれ易い。五段化～レ命令形はこれを避けるのに有効であったろう。そしてそれは、特にシラビーム性の強い西南部で、また一段型など短音節語ほど五段化を先行させる必要がある。

以上から次の様な展開を考える。命令形のラ行五段化は、命令形～ロの地域で、元来のラ行五段動詞への類推で～レ化が始まり（図3で見ると、これは～ロ地域の周辺部での発生と思う）、変化の容易な活用型・短音節語類を先兵として、語末音変化傾向の強い西部とくに西南部へと進出したものと推測される。東部では、この音変化傾向が弱く、五段化の必要性は低い。従って、ラ行五

図4. 「寝よう」(GAJ 108図より)

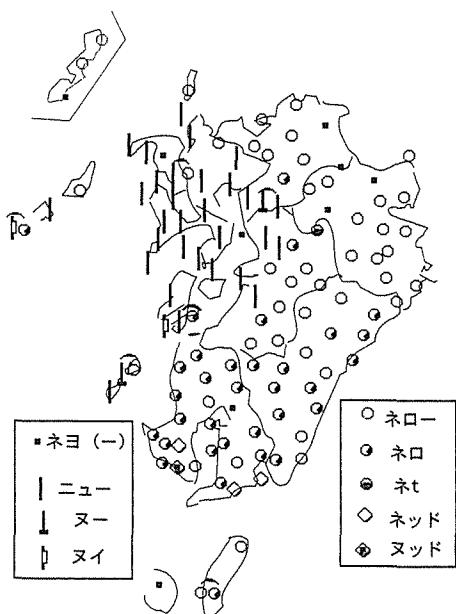
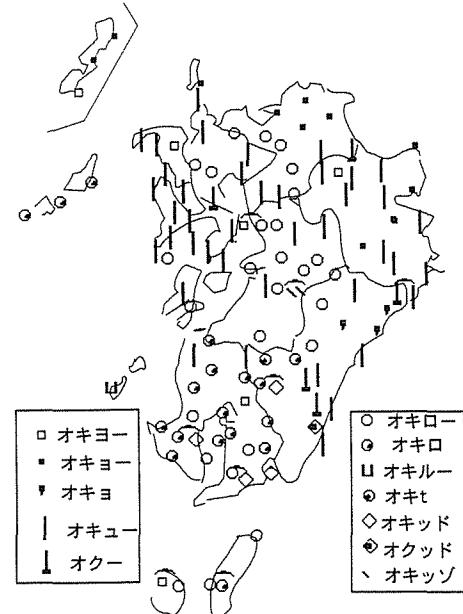


図5. 「起きよう」(GAJ 106図より)



段化に巻き込まれやすい短音節語類を除いて、旧来の二段型の命令形が保たれている。

ウ) 意志形の場合

この五段化は【見る】【起きる】などの＜未然形＞意志表現がミロー・オキローなどとなることである。GAJでの意志形の語類を五段化率の高い順に並べると、次の様である。

「見よう」>「寝よう」>「起きよう」>「開けよう」「書かせよう」

参考として、図4に「寝よう」、図5に「起きよう」の様子を示した。

このうち、「見よう」(準備調査)「寝よう」(108図)は、九州西北部がミュー、ニュー・ヌーの古い形、他の地域は五段化形～ロー(南部はロ>ド傾向のためネッドなどの形)、また「見よう」の方が五段化形がやや広い。「起きよう」(106図)は西北部と東部一帯に旧形式のオキュー・オクーが広く、南部一帯から熊本県に五段化形オキッド・オキローが分布、「開けよう」(107図)「書かせよう」(124図)になると、ほぼ全域にアキュー・アクー、カカシューなどの旧意志形、わずかに鹿児島県南部に五段化のアクッド・カカセンド(～ロー類の転化)がある程度になる。以上の語類の五段化率はやはり前に見たのとほぼ同じ活用型の順である。また、共通して西北部は旧意志形が根強く残存する。

この旧意志形の特徴はウ段拗長音を基本とする。迫野(1975)によれば、中世末ころオ段長音の開合の対立が崩れかけた時期、各地で開音オーが合音オーに接近する中で、合音オーがより狭いウに逃げて開合の対立を保持しようとしたとされる。前田(1951)によれば、九州ではこの対立が大規模に起こって今まで続いている。

国語史(主として京都語史)での意志形は、大塚(1996)などによれば、上一段型語幹単音節語【射る・居(い)る】などの意志形が語幹の安定を求めてヨウを分化させ始め、やがて一般化したとされる。彦坂(1996)で述べた様に、九州ではこの意志形が特有の合音に閉じこめられ、ミヨー・オキヨー・アキヨーにさえなり得ず(これは九州では開音)、ヨウへの分化が閉ざされた。代わりに上一段型(語幹単音節語)を先頭にラ行五段化し、一音節を加えて安定する道を選んだ。方向は違うが、一段型意志形が安定を求める点はヨウの分化に見られるのと同じである(九州の場合は、むしろラ行五段型への類推度の容易さと言うべきか)。

一方、ヨウは、九州の東北部や島嶼部に散見されて、共通語的なものと考えられる。九州での意志形の五段化はこうしたウ段拗長音がどうミロー・オキローなどの形になるかということにある。

さて、小林(1996)は、意志形～ローと命令形～ロは同音衝突をさけ相補分布をしていると指摘する。すると、旧来のウ段拗長音の意志形が西北部に根強いのは、ここに旧来の命令形～ロがあるため、五段化が先行する上一段の「見よう」・上二段の「起きよう」類ですら、この地域では旧来のウ段拗長音形にとどまっているのである。そして先に見た、イ) 命令形の(3)「五段化の中核地域でも旧来の～ロ形が残る」のは、命令形が～レ化した後にしか意志形の五段化形～ローが進入できないため、一部、同音衝突をさける格好で旧命令形・旧意志形が組み合って動けない状況が続いているのだと思う。

活用型の進度と展開 さて、先の様に「五段化命令形～レが旧命令形～ロの地域から発生した」

「五段化意志形～ローは旧命令形～ロと相補分布をなす」となれば、新命令形～レと連動して新意志形～ローが生まれている様に感じるが、この点はどうであろうか。

しかし、GAJの関連図を比較すると、(1)「見よう」「寝よう」など五段化が先行する語類は、南部では命令形が必ずしも～レをとらなくても意志形～ローが生まれている。宮崎県を主として鹿児島県・大分県がそれである。そして、(2)上二段の「起きよう」で～ロ以外の命令形と新意志形の分布域がほぼ一致し、(3)下二段型の「開けよう」「書かせよう」などになると、五段化命令形～レのない地域で五段化意志形が発生している。「開けよう」は薩隅地方にアクッド類が4地点あり、「書かせよう」でも同じ地域に新意志形カカセンド形が兆しているのである。

以上によれば、五段化が先行する語は、同音衝突を起こす命令形～ロさえなければよく、発生はむしろ九州西南部であろう。五段化の遅い上の(3)の語類から(2)(1)の語類へと逆転すれば、発生から展開への過程は(3)西南部から発生し、(2)東部を除く中部へ、そして(1)命令形～ローのある西北部を除く全域へと展開したことが推測される。

西南部が発端と見ることには、上村(1998)の薩隅地方の意志形の解説も参考になる。薩隅地方の(伝統的な)意志形はス(為よう)・ミック(見て来よう)・ヤム(止めよう)とウ段の直音化形で、動詞の基本形スッ(為る)・クッ(来る)・ヤムッ(止める)という入声音の微弱な形とそれこれまで接近すると言う(129頁要旨)。

すると、西南部のシラビーム的発音が作用して意志形と終止・連体形が接近する。それを避けるには、ヨウ分化への道が閉ざされてもラ行五段化すればよく(或いはそれしかなく)、この地域で上の(1)類の短音節語、続いて(2)上二段型などから五段化が先行し、中部・北部へと展開した、動きにくい(3)下二段語はまだ兆候程度、と考えると活用型ごとの語の分布差がうまく説明できる。吉町(1948)も、意志形ローが薩隅地方で先行すると見ている様子である¹。

一方、東部で五段化率が低いのは、やはりこうした音変化傾向が少ないために五段化する必然性が弱く、五段化の先行する語類だけが恐らく南部から進出する形で分布している段階と考えられる。東部では命令形の五段化も低く、連動する模様である。

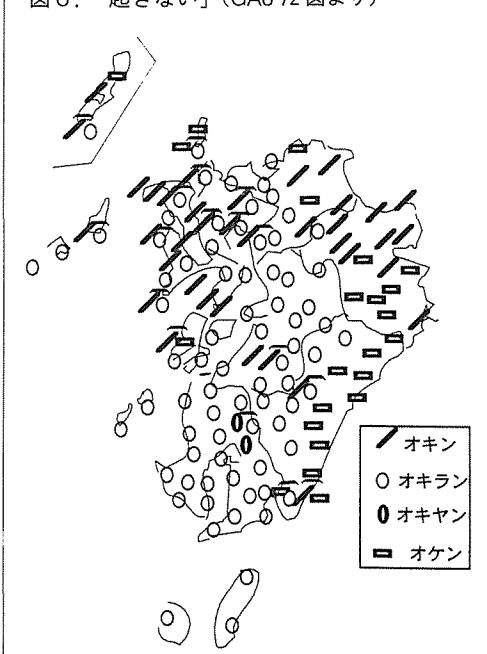
エ) 否定形の場合

GAJにある否定形を持つ語を五段化率の高い順にならべると次の様になる。

「見ない」>「寝ない」>「起きない」>「開けない」

図6として示した中程度の五段化率を示す「起きない」(72図)は、旧形式のオキンが主として西

図6. 「起きない」(GAJ 72図より)



北部と東北部、また東部の中部以南は下二段的オケン、これらを除く南部から中央部に五段化形オキランが分布している。これに対して、五段化の先行する、「見ない」(74図)「寝ない」(79図)などは西北部はミン・ネン、その他の地域が五段化形ミラン・ネランである。「開けない」(77図)は全域が旧形式の下二段で五段化がない。ここでも、活用型による五段化の序列が他の活用形とよく一致する。

これら五段化形の分布を見ると、みな九州西北部が避けられている。ここは、先述の様に旧來のウ段拗長音の意志形が強く、～ロ命令形も幾分のこり、複数の活用形が連動して旧活用型を保つ傾向が強い。否定形もこの傾向に同調しているに違いない。

また、上二段の「起きない」では東部に五段化形が少なく下二段的オケン形である。これは、九州方言学会(1969)・迫野(1998)などの指摘の様に、勢力の強い下二段型に取り込まれたであろう。既述の様に、東部では二段型保持傾向が強く、活用型では下二段がその最右翼であった。

五段化の要因 否定形五段化の要因には、小林(1996)に西日本の短音節否定辞～ンの不安定さを指摘し、この活用形は九州での「音韻傾向」との関連も示唆されている。

ちなみに否定形の場合は、広く西日本にある～ン否定地域の中でも、九州が特に五段化が強く、全国的な模様と違い命令形・意志形に匹敵することは注意すべきと思う。この点でも、本稿では、既述の音変化傾向を広く地域差を解く主要因と見たい。

西南部はこの傾向が最も強く、否定形ミン・オキンなどの聞こえは弱く、また終止形のミッ・オキッ形などとが極めて近くなる。これを避けて、ラ行五段形への接近が促進されたのである。事実、変化の鈍い下二段型「開けない」を除き、西南部に共通してラ行五段化が盛んなのである。

西北部もこの音変化傾向はあるが、ここは【見る】など上一段型は特有のウ段拗長音をもつ意志形や他の非五段傾向が絡み、二段型は終止・連体形ヌッ(寝)・オクッ(起)と否定形とネン(寝)・オキン(起)では語幹形式が違っていて混乱も起きにくく、五段化を強く進める必要が相対的に乏しかったものと考える。

東部では、やはりこの音変化傾向が乏しく、上二段「起きない」・下二段「開けない」に五段化形がない。しかし、短音節語はさすがに五段化が促されたのであろう、「見ない」「寝ない」などは既に幾分か五段化している。

オ) 仮定形の場合

バが後に続く場合の仮定形は、<起きれば>(126図)と準備調査『方言文法資料図集(3)』<寝れば>(139図)だけがある。詳細は省くが、両語とも五段化と二段保持の趨勢は図1「終止形」の同じ語と似た状況である。

カ) 連用形(音便形)の場合

連用形の五段化は「ミッた・ネッた(見・寝)」の様に促音便化した形が予想される。GAJにはまず現れないが、小林(1996)所収の図によれば、九州西半部の南部にやや多く、全国的にも九州のみの語形である。九州方言学会(1969)の記述では九州各地に潜在する様子である(これも先行する一段活用語類を中心の模様)。『口語法』十二条「一段活用の四段化」では、長崎県・佐賀県に促音便の回答がある(他にあった可能性も否定できない)。

この特異な形式の分布は、否定形と同じく九州南部を中心に西部一帯に多い音変化傾向と関わるかもしれない。しかし、〈連用形〉でも音便化しない用法もあり、発生が弱いのであろう。

もう一つ、この形が表面化しにくいのは、ミッテ(見)・ネット(寝)などが「満って」「練って」などと同音衝突を起こす恐れがあり、これを避けたこともあるう²し、また陣内(1989)で言う規範意識もあるう。そうした理由で、この活用形は、伏流するものの表だって現れないのではないか。活用型に対応した分布差もたらえにくいくらい。

キ) 使役形の場合

最後に使役形を見る。これは「起キサセル」が「起キラセル」の様に、動詞末が～ラセル(スル)形をとるものである。他の活用形との整合性から「動詞十ラ」までを「使役形」の五段化と判断する(九州の使役の助動詞自体は強い下二段保持)。

陣内(1981)小林(1996)は、この五段化を、意味的に類縁の受身形【～ラレル(ルル)】の影響を見る。【～ラレル(ルル)】はどこにもあり、そのために全国的に使役形の五段化率が最も高いのである。

GAJでは「開けさせる」(118図)、同準備調査に「見させる」「寝させる」「起きさせる」がある。準備調査のため調査地点が少ないが、九州でのラ行五段化率は(1)高いのは西北部、(2)少ないのは東部、また(3)南部とくに鹿児島県では極めて低い傾向がある。

上の(2)は今まで見た旧形式の保有傾向のためであろう。しかし、(1)(3)は多少事情がありそうである。

まず、(3)南部の低さは、南部にいわゆる迷惑の受身が少ないと(上村1998、124頁)、また薩隅地方は、サ行五段活用【干す・消す・貸す】などが下二段化するため「～セ、～セ、～スル(ツ)」式で(上村1998、55頁、また『九州方言の基礎的研究』240頁、LAJ70図「貸す」・GAJ81図「貸さない」・98図「貸した」も同様)、これに引かれてサ行下二段が強く、この援軍もあって、ラ行五段化が起これにくくと考える。

これに対して、(1)西北部が高いのは、東部ほど旧形式の保有度が強くなく、ある程度ラ行五段化もあるため、「受身形」に影響され易かったのであろう。

ラ行五段化に関連する活用形は他にもあるが、GAJなどで得られる情報はほぼ以上に尽きる。

2.2. 二段型の保持傾向

新興の五段化の対極に、旧来の二段型を保持するものがあった(図1参照)。既にその要因に幾分か触れたが、なぜこれらの地域で二段型が保持されるのか。また、語により差があり、西北部では【起きる】が【寝る】より一段化しやすく、東部では逆である。この語と地域差との関係が問題になる。

小林(1997)は九州で上の語類のウ段拗長音をもつ旧意志形(ニュー・オキューなど)と終止・連体形の二段型(ヌル・オクルなど)の分布がかなり重なる点から、相互依存の関係があることを指摘している。

これは、ウ段音意志形が、二段活用の終止・連体、已然（仮定）形の活用語尾と通う形式であり、次の下線部の様に互いに補強しあっていることを意味している。

【寝る】： ニュー／ヌー・ネた (て)・ヌル・ヌレば・ネイ

【起きる】： オキュー・オキた (て)・オクル オクレば オキイ

本稿ではこの点を地域差を絡めて考える。

さて、今まで考察した主たる活用形を、語と二段型が残り易い地域とを組み合わせて示すと表の様になる。

表 二段残存地域と主要活用形式 *各語の上段は旧来の活用型、下段は五段化型

西北部地域				
	意志	否定	終止連体	命令
見	ミュー	ミン	(ミル) (ミル)	ミロ ミレ
寝	ニュー	ネン	ヌル・ヌッ	ネロ ネレ
起	オキュー	オキン	オキル	オキロ オキレ
開	アキュー	アケン	アクル・アクッ	オキロ

東部地域				
	意志	否定	終止連体	命令
見	ミロー	ミラン	(ミル) (ミル)	ミヨ
寝	ネロー	ネラン	ネル	ネヨ・ネイ ネレ
起	オキュー	オキン	オクル・オケル	オキー
開	アキュー	アケン	アクル	アキー・アケー

まず、西北部で旧意志形～ュー形式がどの語にも残るのは、命令形が～ロの地域で（一方で、五段化形～レも生じてはいる）意志形が五段化～ローになると同音衝突がおこる、これを避けたためと考えられた。これに引かれて、否定形、終止・連体形も五段化しにくく、結果的にこの地域での二段型保有の傾向が出来たと考える。この地域では、ラ行五段化を促進させる西部の音変化傾向よりも、こうした関連事項間の事情が勝ったのであろう。

ただ、終止・連体形は、【寝る】は二段型保有、【起きる】は一段化していて、今までの五段化傾向からすると逆になっている。これは、【寝る】が一段化すると恐らくネッ・ネイ形化して否定形ネンと紛れやすく、その区別のため二段型ヌル・ヌッを保ったのではないか。【起きる】は語幹二音節語（終止形がいわゆる一段化をしたと考えて）で、旧意志形オキューがあつてもまぎれにくく、相対的に終止・連体形が一段化し易かったのかと思う。なお、変化が容易でない下二段の【開ける】は、ここでも強く二段型を保持している。

一方、東部ではこうした西北部特有の制約がなく、五段化が先行する短音節語【見る】【寝る】は、既に意志形や否定形のラ行五段化形がある（恐らく先に五段化した西南部からの進出）。しかし、上二段語【起きる】には届かず、下二段語【開ける】は、所属語の多さも関係するのであろう、五段化の兆候は少ない。西部地域の様な音変化傾向が弱かったためと考えた。

以上、二段型保持の地域差は、西北部は旧意志形の形式に引かれ、また他の活用形も旧形式を保つ傾向が運動して、二段型が保有され、東部は五段化を誘発する音変化傾向に乏しく、一部の活用形と先行する語類を除いて二段型が温存される状況があったと考える。

2.3. ナ変動詞の五段化動向

ナ変の動向については、迫野(1998b)は五段類に入れ、所属語の少なさを五段化の主要因とする様である。しかし、地域差もあって、吉町(1952)以後、九州方言学会(1969)その他でこれを指摘するものも多い。とは言え、五段化の進行度とその地域差を起こした経緯についての研究はない様に思う。

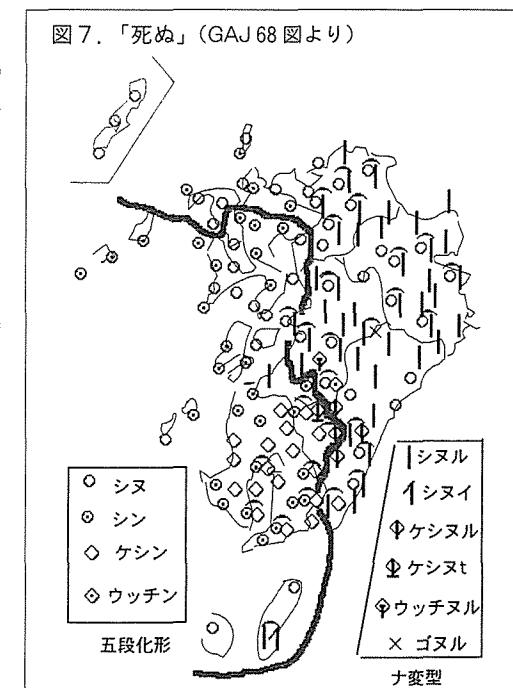
図7がGAJ終止形「死ぬ」(68図)の模様である。全体に五段化したシヌとその類があるものの、九州東部では強くナ変型が保持されている。接頭語付きウッチヌル・ケシヌルも東部ではナ変型を保っていて東西差が強い。東部にも五段化形は幾分あるが、西部に較べると格段に少ない。この地域差が問題となる。

まず、これを東部一帯に見られた二段型の保持傾向と同類のものと考えることは当たらない。二段型の保持は西北部でも強かったのに、ナ変動詞は西北部もよく五段化していて、事情が違う。

西北部の二段型の保持には、九州特有のウ段拗長音の意志形が強く関与したと考えたが、ナ変動詞の意志形の末尾は九州の開音系シノーであり、この条件とは無関係である。命令形も、本来の五段活用と同じシネであり、問題にしてきた五段化形～レ命令形とは無関係である。

ナ変活用の変容には、こうした点ではなく、既に引いた九州西部の音変化傾向がここでも強く働いていると考える。

図7での五段化形の範囲は、語末ルがtやiとなる西部の音変化傾向の地域とよく対応することが注意される。図7太線がその境界（図1の三語のGAJ原図から帰納）であり、これより西部にはナ変型終止形がまず無く、東部には単独の五段化形は極めて少なく、ほぼ区分されている。ナ変「仮定形」（死ねば）は図示しないが、分布模様はほとんど同じである。



ナ変の場合、終止・連体形は末尾ルの母音の無声化、次に子音脱落という道筋で、すぐ五段化形が実現する。旧薩摩領で西南部的音韻傾向をもつ宮崎県諸県地方近辺にあるケシヌル・ケシヌト・ケシン形はこの過程に沿った形式類に違いない。末尾ルは恐らく初期には一拍分の促音・声門閉鎖音などを保っていたであろうが、弱まれば次第に五段化形シヌが成立する。「仮定形」シヌレはシネ形にはやや遠いが、他の活用形が五段化に足並みを揃えれば、活用体系の点からシネ形となることは容易であろう。

【去ぬ】の場合は手懸かりとなる図がなく想像するしかないが、ほぼ似た動きがあるのではないか。吉町(1952)は「往ヌも（死ヌと）同様」とする。

さて、国語史でのナ変の五段化は二段活用の一段化にかなり遅れている(島田1959・彦坂1997)。五段系と一・二段系の混合活用型のために、類推の方向が揺れたからに違いない。九州の場合、後述の様に文献で見る限りでは、終止・連体形の二段型の一段化(実質は五段化への道)に遅れない模様である。これは、上の様な西部地域特有の音変化傾向によって、結果的にナ変の五段化が促進されたからであろう。

2.4. GAJの動向のまとめ

以上、九州での活用体系の変化について、特に問題となる上一・上下二段型とナ変の模様を検討し、五段化と二段保持の二極化傾向の内実をさぐってきた。今までの研究を参考にし、また特に活用型と音変化傾向がそれに強く関与するとの観点から説明を試みた。(1) ラ行五段化では、上一段型>上二段型>下二段型の活用型順、また短音節語などの条件による発生・進展の差があること、(2) 音変化傾向では、九州西部とくに西南部に顕著な語末のイ・ウ段音の促音・イ音化傾向やシラビーム的性格が強く関連することを指摘し、(1)と(2)を掛け合わせた形で分布模様の複合層を解釈した。また、ナ変の五段化の地域差も上の(2)で説明できるとした。

これによって、ラ行五段化の発生と進行、またその地域差の要因を、およそ次の様に推測する。

- (1) 命令形～ロ～レの動向
- (2) 意志形～ロー、否定形～ラ(ん)
- (3) 使役形～サルル～ラルル

(1) はやはり命令形が～ロ地域の西北部から発生した(小林氏の指摘)。私見ではその周辺部からと思う。そして、先行する活用型の語類が先んじて、聞こえの小さい南部の命令形を浸食しながら進展したと見る。(2) は西南部から発生し、先行活用型の語類は中部へ展開した。(1)(2)には九州西部、とくに西南部の音変化傾向が強く関与したと考える。ただ、「意志形」～ロは旧命令形との同音衝突を避けて、西北部の一部で五段化が遅れている。

(3) は全国一般に広くある受身形の影響が強く、これが優勢なラ行五段動詞と協調して五段化を引き起こしたとされる(陣内・小林)。ただ、九州南部では他の活用事象と絡んで、その分布が乏しくなっている。

- (4) 旧来の二段型の保持

これは、ラ行五段化と裏腹の関係であり、二段保持傾向は西北部と東部に顕著であった。西北

部の要因は旧来の意志形の強さが主要因と思われるが、東部は西部的音変化傾向が乏しいことに起因すると考えた。

(5) ナ変動詞の五段化の地域差

これも上の音変化傾向が作用し、その地域差に対応して西部は五段化が強く東部は弱いと見た。

活用体系とその地域差 以上の九州での活用体系を学校文法の枠組みで考えれば、ラ行五段化に関する面は、GAJの図のうちの次の様な活用形から帰納される。

<未然形>・・・意志形（～ロー）=南部から中部に多い。

使役形（～ラスル）=西北部に多く、南部に少ない

<連用形>・・・音便形=伏流する模様ながら明確でない。

<終止・連体形>・・・終止形=上一段型はそのままで五段型に組み込まれる。二段型はいわゆる一段化の過程が必要となり、西北部と東部一帯で二段型保有傾向大。

<仮定形>・・・バに後接された形=分布は「終止・連体形」とほぼ同じ。

<命令形>・・・命令形（～レ）=西北部から中部・南部へと展開の模様。

各活用形を総合した体系では、最も五段化傾向の強い地域は南部から中部にかけての地域であり、低いのは西北部のやや狭い地域と東部の広い地域となる。またその五段化には、活用型による序列があった。ナ変はこれに対して、西部が五段化し東部はナ変保持という様相である。

ナ変を含めて活用体系を総合すれば、やや共通語化の傾向もある島嶼部や北東部を除き、南部から中部にかけて・・・上一段・上二段の五段化、下二段保持傾向、ナ変五段化
西北部・・・上一段の五段化、上二段は幾らか保持、下二段の保持、ナ変五段化
東部・・・上一段の五段化、上二段・下二段保持、一部上二段の下二段化、ナ変保持
という体系とその地域差が考えられる。

また、迫野氏の言う、二段活用が一段化の過程を経ず直接五段化したとする点は、各<活用形>を通して安定した一段型が存在したか否かの点で見れば、やはり直接五段化した傾向が強い。

3. 過去の方言文献からの検討

先の様な活用型の二極化傾向は、いつ頃から始まっているのであろうか。以下では、方言文献からこれを探ってみる。その焦点は、活用型による進行度、音変化傾向などの地域差であろう。

3.1. 明治39年『口語法調査報告書』の模様

この報告書は、全体を見渡すのに有益である。ラ行五段化の様子は、先に彦坂(1999)で検討し、上一段型に見られ、上二段型に兆し、下二段に未発、つまりGAJの一段階前の模様であった。

本稿では、もう少し詳しく地域差を検討する。

まず、二段型の終止・連体形の五段化（いわゆる一段化形と同じ）は、上二段は西部で五段化傾向があり、東部では二段保持、下二段は北部都市部を除き、ほぼ全地域で二段保持の傾向である。詳細は次の通り。

上二段を第三条【起・落・試】などで見ると、五段化は福岡県（筑前北部～豊前除く）、熊本県、

鹿児島県、混用は佐賀県（小城郡二段）、長崎県（都市部一段、ヤ行動詞「報ゆる」などは二段強し）、二段保持は大分県、宮崎県（北・西諸県郡、児湯郡米良は一（五）段化）の状況。下二段を第四条で見ると、福岡県都市部五段化、また短音節語「得る」が長崎県で五段化報告の他は二段型。五段化は進行せず、西北部を外れた北部地域に兆すのみ。

命令形の概要は、五段化率はやはり上一段型>上二段型>下二段型の順であり、GAJよりもやや低調、分布は西北部に旧来の～ロ、中・南部に五段化形～レ散見、他は～ヨ系（～イ・エ含む）といった状況である。詳細は次の通り。

上一段を第五条【射・着・似・見・乾・居】の語、および十二条（ほぼ同じ語類）で見ると、五段化形～レは、長崎県を除く各県にあるが、西北部は旧来の～ロが強い。～ヨ系は宮崎県・鹿児島県に多く、福岡・大分・熊本県、～レはやや低調、他はGAJの状況と同じ。

上二段は、第三条で、五段化～レは佐賀県の東端（田代）、熊本県の一部、宮崎県諸県郡、児湯郡米良、鹿児島県（～イもあり）であるが、それよりも旧来の～ロが佐賀県・長崎県と熊本県の一部、～ヨ系が大分・宮崎県で強い。南部地域は～イ形もかなり出ている。

下二段は五段化形～レはない。以下は上二段に準じるので略。

未来形（本稿の意志形）の概略は、西北部と東部に旧来のウ段音意志形が濃厚、五段化は南部が強い。詳細は次の通り。

第五・十二条での上一段型語類は、五段化意志形～ローがほぼ全域に対し、ウ段音旧意志形が西北部に残る（鹿児島県は「混用」か、詳細は不明）。上二段語類は、第三条によれば、宮崎県臼杵郡・佐賀県唐津などのヨウ（共に転封が主要因だろう）を除けば、宮崎県諸県郡・児湯郡の一部に五段化形～ローがある他は、ほとんど旧形式である。諸県郡・児湯郡は五段型「起キル」もあり、連動する模様。諸県郡は薩摩系で西南部特有の音変化傾向があり、児湯郡も類似の模様なのも注意される³。

下二段もまず全域が旧形式の二段型形で五段化形はない。

否定形の情報は得られない。

以上は、GAJの考察で見た五段化の段階と活用型の序列とが一致する。ただ、鹿児島県での意志形は、GAJで推測したほど五段化が進行していない。これは全県一律の簡単な報告のためかも知れない。似た音変化傾向のある宮崎県諸県郡・児湯郡でのラ行五段化の進行度の高さを参考にし、GAJの模様や吉町(1948)の記述⁴を参考にすると、鹿児島県での五段化は『口語法』の報告よりも少し進行していた可能性があると思う。

十二条には上一段型語類の運用形の情報もあり、五段化「射ッて」が長崎県（【射】の語だけか）、佐賀県にある。しかし、他の県は言及がなく、全域の判断はしにくい。

他に、上二段型の【起きる】【落ちる】の否定形がオケン・オテンなど下二段化する傾向も、佐賀県東端（田代）、宮崎県延岡（在村方）にあり、鹿児島県の命令形「落テイ」は五段化か。この下二段化現象は迫野(1998)に福岡県東部・大分県南半部・宮崎県東部・壱岐・対馬などに見られことが指摘され、九州方言学会(1969)にも記載がある。多くが二段保持の傾向がある九州東部地域であることは偶然とは思えない。

次に、ナ変型は、中国・四国で保持され、九州ではほぼ西部で五段化・東部で保持という東西差が現れる。詳細は次の通りで、GAJの状況と似ている。

四段型を主とする県は、広島・鳥取・徳島・長崎・福岡・佐賀（小城郡除く）・鹿児島、これに対しナ変型は岡山・山口・高知・大分、混用は島根・広島・香川・愛媛・熊本県（四段が勝る模様）・宮崎の各県である。

ただ、宮崎県はナ変点在の中に全体に四段化が報告され、GAJと齟齬するが、九州方言学会（1969）や吉町（1952）などを参考すると、『口語法』がやや新傾向に傾いて回答したためかと思う。

以上の全体を総合すると、ラ行五段化の進行度はGAJの一段階前の模様、ナ変はかなり今日の模様に近い。全体の地域差は、ほぼGAJと似た様子があると言えよう。

3.2. 近世期方言文献資料の模様

さらに遡って近世期の方言文献をさぐってみる。参考になるものは多くないが、主として長崎・佐賀、鹿児島のものが有益である。

長崎・佐賀地方 この地方は、篠崎（1961・97）が参考になる。それによれば、幕末頃の長崎地方を主とする模様は、活用型は幕末期の滑稽本・方言書・外国資料などでは下二段型がよく保たれ、上二段は用例が少ないと、「一段化が完了しつつあった」、ナ変は先行研究も加えて「四段化例もあるが完了してはいない」、サ変・カ変は「中央語と同じ」との考察がある。

同氏は、ラ行五段化に「づ(出)らんばい」（『物類称呼』安永4）、カ変にKiro（マクドナルド『日本冒険談日米語彙』）をあげるが、「上一段化した上二段動詞が、さらに四段活用化することは、江戸時代末期に長崎ではまだなかったものと考えられる」とする。この記述では終止・連体形の一段化が先行し、他の活用形を加えると全体としての一段化があった可能性がある。

改めて調査すると、篠崎氏が昭和3年翻刻本文によった『伊勢道中不案内記』に上・下二段の「一段化例」があるとする諸例（篠崎1961）は、写本で検討すると、翻刻時の送り仮名付加と思われる場合や上方・江戸者の例を除くとやや減るが、それでも主人公の佐賀藩士の下二段語が「忘れる」（二編四）「見へる」（後編二）など見られ、五段化の解釈可能性のあるものが残る⁴。

ナ変も「死ぬの生るの」（後編三）と五段化形がある。

また、篠崎（1997）の指摘する「二階から三階へおッこちる」（近世末頃『一寸見た夢物語』⁵）は「諫早辺りのもん（者）」の注があり、佐賀市街の言葉に対して地方の口頭語と見られて、初期的な一段化ないし五段化可能性の例とも考えられる。他に、

『柳川方言洹河沙一撮』（以下『柳川方言』）⁶に

○新茶いる（入ル） くちやびん（土瓶） 一丁ばちがへし（アケテ水ヲイレル事）

とやはり注部分に同様の形が見える。注記に現れるのには何らかの意味があろうが、下二段にも場面・文体によっては幾らかいわゆる一段化が兆していたのであろう。

次に、命令形では、GAJで五段化が先行した活用型の上一段語でも、『一寸見た夢物語』には「見ろ」「来て見ろ」など～ロを保ち（「見よ」は口上例のみ）、他に下二段型「つかまへろ」「見てくれろがしに」などがあり、五段化した～レはない。『伊勢道中不案内記』には関連する例を見つけ

ていない。

意志形も、やはり GAJ で五段化が先行した上一段型もまだそこに至らない段階であり、『柳川方言』では「見う」「しう（為）」とウ段拗長音と考えられ、五段化の遅れる下二段型は勿論「しかきう（仕掛）」、『一寸見た夢物語』でも「聞シウ」などの形である。カ変は、篠崎氏が「Go-to-away Kiro」（来）（マクドナルド）の例を引き「当時はむしろ（カ変は）『ろう』が付いたと考えられる」とするが、稀な五段化例である（この例は、推量ロードではなく、意志形と見る）。

否定形も五段化例はまずない。『柳川方言』では「なめて見んかん」（カンは終助詞）、『一寸見た夢物語』では「見んか」、「落ン」「せん（為）」などで、上一段語でも五段化していない。篠崎氏の指摘した珍しい五段化形「長崎にて、づらんばい」も五段化が先行したと思われる語幹安定を求める短音節動詞である。

以上、ほぼ九州西北部の模様を窺わせる状況は、上二段の終止・連体形の一段化はあるが、他は各種のものが兆す程度である。終止・連体形の一段化形が先行し、他の活用形がそのままなら、上二段型は一旦一段型の活用体系の段階を経て、後で他の活用形が五段化し結果的にラ行五段化した可能性もある。ただ、文献ではその時間差の詳しい考察は難しい。

薩摩地方 この地方では18世紀前半のゴンザ関連のもの⁷と、幕末の稿本『大和言葉口上集』⁸をとりあげたい。

ゴンザの『新スラヴ・日本語辞典』（日本語版）での活用は、迫野（1989）によれば、上二段の一段化は「かなり認められる」が、「下二段の一段化は見出せない」とし、また「ヂェケン（出来ぬ）・オチエン（落ちぬ）」の様な下二段化的な形も指摘されている。

下二段語の勢力は短音節語でも二段型のズル（出）形が複数見られ、やはり一段化には遠い。「トカス（融）」に対しトカスル形は、使役の助動詞に類推した可能性が高く、下二段型の強さを示す例であろう。

改めて調べると、ラ行五段化に関わる活用形は、意志形は少例であるがヤキュ（焼）、ウッシュ（失）で、五段化例はない。否定形も、先行する一段型でもミン（見）と五段化はまだ、サ変もシェン、五段化の遅れる長音節語類は言うまでもなくマケン（負）・ワスイエン（忘）と旧形式である。

命令形の手かがりはない。

一方で、ゴンザ「日本語会話入門」では、否定形にネラン（寝）があることが注意される。これは、下二段でも短音節語で、語幹の不安定さのために、早くラ行五段化したのであろう。

以上から、この時期のラ行五段化は、まだほとんど未発の様子と考えられる。

ナ変は、『新スラヴ・日本語辞典』では、シヌル形であるが、末尾ルは母音の無声化を起こしている。『漂流民の言語』所収、ゴンザの「日本語会話入門」には、他に、

4 ftò sít̚ fr̚ トシント 人は死すべきもの。

201 sinur majegakčekara fin シヌル マイエガクチェカラ シン

死ぬ際には致命的に重態であるものだ。

205 čuba taták fin チュバ タタク シン 癲癇病は致命的に弱める

とある（カタカナ下の「。」は村山による母音無声化の印）。鹿児島県立図書館蔵、ロシア科学アカデ

ミー版のマイクロフィルムで見ると、上の *fin*・*finur* の *n*・*r* の後に硬音符が付けられていてシヌ・シヌルの末尾音の母音無声化形と知られる⁹。

以上からは、薩摩地域ではシヌルのル音が不安定で、一部にはシヌ（聞こえとしてはシンか）もあったと考えられ、五段化に移行途上の段階と考えられる。

ゴンザ関連資料からは、「語末音節の母音は弱まっているが、いわゆる『促音化』は見られない」（村山1965・85）段階、「語末のヌは撥音化している」（田尻1981）の指摘がある。今日では語末が *t*, 地域によって *i* となり、また短縮された発音となる。するとナ変は、次の様に変化し、

シヌル—シヌ *r* → シヌ *t/i* → シヌ—シン (tとiは地域差のある模様、上村1998)

ゴンザのものは、この第二形が多い中に最後の段階もある状態と考えられる。第三段階のものはゴンザには無いが、GAJにはよくある。こうして、ゴンザ資料でのナ変は五段化する兆しがある。

次に、下って幕末頃とされる『大和口上言葉集』を見る。

上二段は、用例自体が少ないが、「運命只今かぎりにつくる（尽）事か」(33ウ) の様に二段保持、下二段型の語類は多数の二段保持に対し、末尾注部分に「ドガエルト云ハ タヲレル」「フトングヘルと云ハ ホトケル」など一段化の形がややある。語意の注釈にしてくだけた語形を用いたのか、共通語的な姿勢なのか不明であるが、注意される。

以上の状況は、上二段の二段型保持に対し、下二段の一段化例があることになるが、『口語法』やGAJの趨勢では上二段の方がはるかに一段化の率が高かった点で、そのまま幕末期の実状を語るとは思えない。下二段が注釈付き文脈であっても一段化の兆した例があるのなら、薩摩でも、上二段の一段化（つまり五段化）の趨勢が確実に起こっていると推測する方が合理的であろう。

ラ行五段化に関わる活用形は、命令形では、「～て呉れ」（複数例）の他は「出ち見よ」「預けひ」と～ヨ・～イの形になっている。「～て呉れ」は本来ラ行活用であること、また恐らく頻度の高さから、早く五段化したのではないか。

意志形は、才段拗長音と考えられる「申上ケウ」(25オ)・「しよ（為）ことハ」(36オ) の他、ウ段拗長音形の「呉りふ」(30ウ)・「死にをしゆ（為）よりは」(28オ)、ヨウの可能性もある「見ようなら」(27オ)などがある中に、「見らふ」(37オ)、「ねらふ（寝）」(37オ) のラ行五段化例が出てくる。ここに各種のものが混在するが、比較的新しい変化であるラ行五段化例はやはり初期的な上一段語や下二段語でも短音節語である。なお、才段長音の「申そふかひ」(27オ) に対しウ段長音形かと思われる「申すふ」(36オなど複数) があるのは、多くのウ段拗長音の形式に引かれたのであろう。意志形はなおウ段長音を残しながら、一方では新しくいくらかラ行五段化の初期例と考えられるものがあることになる。

ゴンザのものと幕末稿本とを比べると、ゴンザでは二段活用の一段化は上二段にやや兆す。幕末稿本では下二段にも及んだもののわずかと思われ、ラ行五段化にかかる活用形では、意志形や否定形の語幹安定を求める短音節語にいくらか生じていたと推測される。

その他の地域 『交隣須知』（京大本）は、迫野(1989)によって対馬方言との関連が指摘されている。活用でも終止・連体形の一段化形が多く、今までの資料とかなり違う様相である。詳細は省くが、幾らかあるラ行五段化は、ヨウ分出へと向かう動向のいわば脇筋として、不安定度の高い

上一段語幹単音節語に一時生じたものである可能性が高い。九州主要地域の状況と比較すると、これらとは一応区別した見方が必要と思う。ナ変については用例がなくて分からぬ。

以上、近世期の模様を概括すれば、五段化は末期に上一段型を主とする初期的な段階に兆す程度、ナ変はしかし五段化例もある。今日の九州西南部を主とする音韻傾向は、どうやら動詞末尾音の無声化の段階であったことが分かる。

4. GAJ と方言文献との連携から

前節までの GAJ と過去の方言文献の考察を対比し、通時的な変化の模様とその特色を整理する。

4.1. 全体的な五段化の様相について

今までの考察から、九州での動向は、進行する全体的な五段化傾向と二段型・ナ変保持傾向が対峙した格好であり、この変化にそれぞれの活用型と地域差を起こす諸要因がどう関わるかが問題であった。そこで、活用型による進行度、主要因と考えた西部地域の音変化傾向の発現の時期が焦点となろう。

活用型による進行度 GAJ から整理される今日の模様については繰り返さないが、下二段型保持の一方で、上一段・上二段のラ行五段化・ナ変の五段化が地域差を伴って発現していた。

これが明治期の『口語法』では、ラ行五段化はほぼ上一段語まで GAJ の前段階、ナ変の五段化と地域差はほぼ GAJ と同じと考えられた。

近世期に遡ると、佐賀・薩摩地方でのラ行五段化は近世末期に上一段型語類にいくらか兆していた。この辺りがラ行五段化の始発の時期と言えそうである。上一段語は、語幹が単音節であることに加え旧来のウ段音の意志形などがあり、活用形相互の共通度が低く不安定であった。二段型が一段化すれば援軍を得て安定するが、二段型はウ段音を持つ旧意志形の影響で動きにくかつた。このため上一段語は、語数の多いラ行五段型語類に合流し、音節数も長くして安定を計ったのであろう。

『口語法』の時代は、その動向が強まり、上二段語類まで巻き込んだ時期と言える。しかし、動きにくい下二段語類は今日でもそれを維持する傾向が強い。

ナ変は、近世末に既に終止・連体形シヌが散見されて、五段化が近い模様であった。

近世中期のゴンザのものになると、ラ行五段化はまず無く、未発の模様である。しかし、ナ変は、五段化が既に兆していた様子がある。

以上は、主として長崎・佐賀、薩摩地方の模様の推測である。それに対し、東部地域はどの場合も不明であるが、GAJ の模様から推して、旧活用型が堅持されていたに違いない。

九州西部の音韻傾向 九州での地域差には、その音韻傾向が大きく関与したと考えた。その模様はどうであろうか。

ゴンザのものでは、既述の様に語末母音の弱化の段階（村山他）であるが、下って近世末薩摩方言を反映すると言われる『大和口上言葉集』には、次の様な例がある。

○こゝハ平日から人通りの少ないところで昼の日中さへもこゝを独通るニハいすか氣舞のわ
るひ所ぢやつ。(36ウ)

○夫ならまたあの肝要なしち物か入ちよつで錢のもたしち受させさうなもんぢやッ(37ウ)

断定ジャルの末尾ルの母音無声化ないし促音化、「昼」もヒルのルの撥音ないし促音化であろう。これらを直ちにルの促音化とは言えないにしても、ゴンザのルなどの末尾母音の無声化と比べると、もう少し今日的な模様に移行する段階の例であると思う。資料性にかなり問題を残すが、この時期には薩摩地方の今日の音韻傾向が実現する時が近い様に思う。

なお、吉町(1976)所収、「紫雲山人鹿児島方言文学四書抄」(明治～大正期)には、明治後期の末尾ル音の促音化例が次の様にはっきり現れてくる。

濕るツド(濡る) 何すツ(する)とかい (明治三十八年「さみだれ日記」)

同じく近世末期頃、佐賀の『一寸見た夢物語』では、語中の例であるが、「むいな(無理な)」、「己」、「わい達(我)」「だいも(誰)」「おこい(癪)」などがあり、ラ行音のイ音化傾向が現れている。

こうして近世末期に余り遅れない時期には、次第に語末の促音・イ音化が兆したのではないか。仮にそうなら、これが全体としての五段化の兆す時期と一致しているのも、両者の関連の深さを語ることになる。東部ではこのような状況は今までほとんど生まれていない。

こうした音変化傾向の発現に促されて、一・二段型のラ行五段化とナ変の五段化が地域差を含みながら進行し、全体として五段型の進行度の早い<西南部や中部>と五段化が遅く二段型保持傾向の強い<西北部と東部一帯>との対立が出来上がってきたと考える。

4.2. 西部方言の中の九州の活用体系

こうした九州の活用体系は、主として型の区別の多い西日本の範囲でどう位置づけられようか。

GAJでは、中国・四国はまだナ変が保たれ、国語史の活用体系の変化に照らすと一段階古い体系であるが、九州では五段と下二段との二極化傾向を示し、地域差も大きく、対応しない。中国・四国地方が近畿と近い関係にあるのに対して、九州は以上に述べた様な方言的性格のために独自の変化をたどったのである。体系的な一段型化は明確でなく、上一段・上二段がラ行五段化したこと、また九州西部でのナ変の五段化は中央より早い点が異なっていた。

こうした特異な活用体系の変化の経緯には、しかし、その過程で国語史での変化のメカニズム一段型語幹単音節語における意志形でのヨウの分化や、二段活用の一段化にみられた活用型による遅速¹⁰の背後にある性格一が、方向こそ違え同じ様に関係している。これらは日本語の活用型における歴史的变化に共通する点で、その上に九州での特有の歴史的経緯をもつ諸事象が被さり、見てきた様な二極化が起こったと考えられる。

注

1 吉町(1948)の「未来助動詞活用分布表」の【見る】【入れる】で見ると、五段化形ローは鹿児島県薩隅と宮崎県諸県地方が最も多い。他はほぼウ段拗長音形が大勢を占める。また、吉町(1952)に「未来助動詞に関しては、入りュー・見ユー(中略)九州全般、入りヨー・見ヨー(中略)福岡北半、対馬、であって、即ち九州全般は未だ古風を失はず、薩隅はローとラ行四段を以てする」とある。

- これによっても新意志形～ローが薩偶地方でことに多いことが分かる。調査は昭和10年頃の模様。
- 2 柳田(1985)190頁に既に同音衝突を避ける指摘がある。
 - 3 藤原(1986)所収の「宮崎県児湯郡村所方言」の記述から判断している。
 - 4 昭和3年翻刻のものは肥前史談会古書刊行部発行。今回比較に使用したのは佐賀県立図書館「野中家文書」の江戸期末期と思われる写本である。両者は巻構成が若干違い、本文にも出入りがある。この資料は奥村(1989)第四章2佐賀県に研究・紹介がある。
 - 5 『滑稽洒落 一寸見た夢物語』(慶応三年の序文)は、吉町(1976)所収の翻刻による。
 - 6 雑誌「方言」昭和8年2月号所収、岩淵悦太郎翻刻・解説の本文による。解説には、東大国語研究室蔵、美濃判袋綴写本七枚、江戸中期頃までさかのぼれる転写本とする。九州方言学会(1969)の「文献解説」にもあり、江戸中期以後の見方をとる。
 - 7 村山(1965・1985)、および鹿児島県立図書館蔵ロシア科学アカデミーマイクロフィルムによる。
 - 8 吉町(1976)所収の翻刻による(初出は、1945年『文学研究』34)。幕末期の稿本と推定され、沖縄人の薩摩言葉学習用の参考書の由。九州大学国語国文学研究室で昭和14年に副写本作成ともあり。九州方言学会(1969)にも解説がある。以下の例は、この翻刻及び副写本の両者に共通することを確認している。
 - 9 江口(1996)によれば、軟音符・硬音符は副次的にそれぞれ主としてイ・ウ母音の無声化の表示に用いられる由。また、ロシア科学アカデミー版については、木部暢子・駒走昭二氏の教示を得た。
 - 10 坂梨(1970・87)などにある様に、二段活用の一段化の完了が京都語史では近世前期頃とされている。問題は、蜂谷(1977)によれば、中世末の言語を反映するとされる狂言詞章では上二段より下二段語類が先行する数値が示されていることである。この解釈として、坂梨の言う様に多数の語類を所属させた下二段が初期例も多く、完了するのも遅いという見方もある。関連して、柳田(1993)で母音連続の関連でヤ行活用動詞が先行したとの説がある。蜂谷の表を点検すると下二段の一段化例のかなりが該当する。にわかに決めがたいが、九州でも『口語法調査報告書』の模様、九州での九州方言学会(1969)吉町(1975)またGAJでの模様を考えると、全般に上二段が先行し下二段が遅れたことはやはり認められるものと思う。

参考文献

- 江口 泰生 (1996) 「一八世紀初頭薩偶方言における促音と撥音の音価について」『文献探求』34, 77-92, 文献探求の会(九州大学国語国文研究室内)
- 大塚 光信 (1996) 『抄物きりしたん資料私注』精文堂, 第八章
- 大西 拓一郎 (1995) 『日本語方言活用の通時的研究序説』文部省科研費報告書
- 奥村 三雄 (1989) 『九州方言の史的研究』桜楓社
- 上村 孝二 (1998) 『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 九州方言学会 (1969) 『九州方言の基礎的研究』風間書房, 同改訂版(1991)
- 小林 隆 (1996) 「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』45, 1-25, 東北大学文学部
- (1997) 「動詞活用における一段化傾向の地理的分布」加藤正信『日本語の歴史・地理構造』72-86, 明治書院
- 坂梨 隆三 (1970) 「近松世話物における二段活用と一段活用」『国語と国文学』47-10, 157-174, 東京大学国語国文学会
- (1987) 『江戸時代の言葉・上方語』東京堂出版
- 迫野 虔徳 (1975) 「オ・ウ段拗長音の動搖」『国語国文』44-3, 29-43, 京都大学文学部国語国文学研究室

- (1989) 「交隣須知を例として」、奥村三雄『九州方言の史的研究』、410-445、桜楓社
- (1998a)『方言文献史研究』精文堂
- (1998b)「九州方言の動詞の活用」『語文研究』85、72-82、九州大学国語国文学会
- 篠崎 久躬 (1961)「幕末期佐賀地方の動詞」『言語生活』118、73-79、筑摩書房
- (1997)『長崎方言の歴史的研究』(長崎文献社)
- 島田 勇雄 (1959)「近世後期の上方語」『国語と国文学』36-10、67-77東京大学国語国文学会
- 陣内 正敬 (1981)「九州方言に見られる母音語幹動詞のラ行子音語幹化について」『九州大学言語研究室報告』2、3-13、九州大学文学部言語学教室
- (1989)「北部九州の新方言」奥村三雄『九州方言の史的研究』、331-347、桜楓社
- 田尻 英三 (1981)「18世紀前半の薩摩方言」『鹿児島大学教育学部研究紀要・人文社会科学篇』32、1-18、鹿児島大学教育学部
- 蜂谷 清人 (1977)『狂言台本の国語学的研究』笠間書院
- 彦坂 佳宣・船木礼子 (1996)「西部日本における意志形の分布とその歴史」『名古屋・方言研究会会報』13、11-31、名古屋・方言研究会
- 彦坂 佳宣 (1996)「九州地方の『見ロー・起きロー』などの言い方について」『論究日本文学』64、42-53、立命館大学日本文学会
- (1997)『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』(和泉書院)
- (1999)「九州の一・二段活用の五段化」佐藤武義編『語彙・語法の新研究』277-292、明治書院
- 藤原 与一 (1986)『昭和日本語の方言・第6巻 九州東部域三要地方言』三弥井書店
- 前田 勇 (1951)「九州方言におけるオ列長音の開合に就いて」『国語学』5、76-84、国語学会
- 村山 七郎 (1965)「ゴンザの伝える18世紀前半の薩摩方言」『漂流民の言語』、19-128、吉川弘文館
- (1985)『新スラヴ・日本語辞典 日本語版』ナウカ
- 柳田 征司 (1985)『室町時代の国語』東京堂出版
- (1993)『室町時代を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
- 吉町 義雄 (1948)「九州方言推量・打消助動詞活用分布相」『文学研究』23、183-204、九州大学国語国文学会
- (1952)「九州語用言活用分布相要領並補遺」『国語学』8、56-66、国語学会
- (1976)『九州のコトハ』双文社

付記

野中萬太郎氏(佐賀県立図書館・野中家文書)、九州大学国語国文学研究室、鹿児島県立図書館には、貴重な資料の閲覧・利用の便宜を頂いた。本論の査読者からも有益な意見を頂いた。記して感謝致します。また、本稿は日本方言研究会・第67回(1998年10月、九州大学)での発表を補訂したもので、文部省科学研究費による成果の一部である。

(投稿受理日:2000年8月21日)
(改稿受理日:2001年1月30日)

彦坂 佳宣(ひこさか よしのぶ)

立命館大学

yht02860@lt.ritsumei.ac.jp

On changes in the conjunction system in Kyūsyū

HIKOSAKA Yoshinobu

Ritsumeikan University

Keywords

Kyūsyū dialect, conjunction system, difference in areas

Abstract

It has been pointed out that in Kyūsyū changes in the conjugation system took a unique direction, compared with those in Standard Japanese as well as most Japanese dialects.

- 1) *Kami-Ichidan* 'Upper Mono-grade' and *Kami-Nidan* 'Upper Bi-grade' have changed to *Godan* 'Quinque-grade' in western, especially southwestern areas.
- 2) *Shimo-Nidan* 'Lower Mono-grade' has been preserved.
- 3) *Nahen* 'Irregular N' has changed to *Godan* in western areas.

The purpose of this paper is to examine these changes and to study what caused these phenomena by analyzing language maps in Grammar Atlas Of Japanese Dialects (*Hōgen-bumpō Zenkoku-chizu*). An analysis of numerous maps related to these phenomena has shown that:

- a) As for 1) and 2), the *Kami-Ichidan* changed first, and the resultant *Godan* form occurred over a wide area; the *Kami-Nidan* changed later and the range was not as wide. The *Shimo-Nidan*, however has kept its original form over wide areas.
- b) In the northwestern and eastern areas, not only *Shimo-Nidan* but also *Kami-Nidan* has been preserved. The reason for this might well be because traditional volitional forms used in the areas like *myū* and *okyū*, which have their "u" form in common with the *Nidan* form, used in the areas have worked to preserve their original forms.
- c) The distribution and cause of phenomena 1) and 3) could well be explained by the rhythmic units in western, especially southwestern areas, which are not based on mora but on syllable. Because of the absence of the rhythmic units, 1) and 3) did not occur as often in eastern areas.
- d) Based on an examination of some literature from the Edo era, it can be conclude that phenomena 1) and 3) started around the latter years of the Edo period, and came from specific features of Kyūsyū dialect.